

ラカンにおけるシニフィアンの理論

—「無意識における文字の審級、
あるいはフロイト以後の理性」における、
シニフィアンの連鎖及び主体の位置について—

川 崎 惣 一*

**Theory of signifier in Lacan —on the signifying chain and the position
of subject in “the Instance of the Letter in the
Unconscious or Reason since Freud”—**

KAWASAKI Soichi

In this paper, I want to make clear the lacanian theory of signifier in the view of the signifying chain and the position of subject. The signifier has its sense in the signifying chain, in the relation to other signifiers. The subject in the lacanian theory is not ego, the imaginary construction, but the unconscious subject, which is the real subject. Lacan divides the subject of enunciation and that of enunciation. The subject of enunciation is the true subject and is approached through signifiers. This doesn't mean that the subject is independent from signifiers. The subject, in the lacanian theory, is the effect of signifiers, and to approach it is possible only through signifiers retroactively. In this sense, the famous lacanian thesis, “the unconscious is structured as a language”, must be understood in the literal sense.

(* 城西国際大学 講師)

ジャック・ラカンはフランスの精神分析家であり、精神分析における代表的な理論家であったが、彼の有名なテーゼの一つに、「無意識は、一つのランガーシュとして構造化されている」というものがある。この言葉をどのように理解すべきだろうか。まず、精神分析があくまで対話という言葉を用いたやり取りを通して行われることを考えるならば、患者の無意識は、分析家のみならず患者たる被分析者にとっても、言語的な構造というフィルターを通して初めて明らかにされる、ということを意味していると受け取ることができる⁽¹⁾。

しかしながら、ラカンは無意識について、より徹底した考え方を取っていた。すなわち、ランガーシュを構造化している原理と同じ原理によって構造化されている、あるいはさらに、無意識は文字通りランガーシュとして構造化されている、ということである。彼は、「ランガーシュは無意識の条件である」とさえ述べていた⁽²⁾。ここで我々は、無意識と言語との関係をどのように理解するのがふさわしいのか、という重大な問題に突き当たる。

このことを考えるうえで、ラカンの思想の要をなす、シニフィアン理論の検討を欠かすことができない。シニフィアン理論こそ、ラカンの思想をオリジナルなものとしている最大の要因であり、かつ、ラカンが精神分析に対してなした最大の貢献だからである。

我々はラカンのシニフィアン理論を検討するために、主として、『エクリ』に収められた論文「無意識における文字の審級、あるいはフロイト以後の理性」(E 493-528)⁽³⁾を取り上げる。この論文は、ソルボンヌ大学「文学部学生連盟」の哲学グループの求めに応じて1957年に行われたセミナーがもとになっている。我々が読むことのできる、『エクリ』に収められた論文は、このセミナーが同じ年に論文としてまとめられたものである。この論文は、そのタイトルにあるように「無意識における文字の審級」を論じたものである。文字とは代表的なシニフィアンであり、我々はこの論文を検討することによって、ラカン思想における「意味するもの」としてのシニフィアン（「シニフィアン signifiant」は動詞「意味する signifier」の現在分詞形である）の理論を十分に理解することができる、と期待してよいであろう。またこうした検討によって、後に論じるように、主体の位置 position に関するラカンのオリジナルな理論にも接近することができるであろう。なぜなら、ラカンの主体とは、シニフィアンの理論を踏まえることで初めて到達するような主体だからである。

1 シニフィアンの優位

さて、ラカンはこの論文の始めのところで、今日の精神分析家が「パロールに触れる」ところまできた、と述べた後で、この論文の表題について次のように記している。

「我々の表題が理解させてくれるのは、このパロールの彼方で、精神分析の経験が無意識のなかに発見するのは、ランガーシュの構造全体だ、ということである。」(E 495)

どういうことか。この論文のタイトルにある「審級instance」という言葉は、言うまでもなく、フロイトの理論における「審級Instanz」のことを指すが、フロイトにおいては、「審級」とは「検問所」のことであり、ここを通ることによって、無意識の内容は前意識から、さらに意識のうちに現れてくることができるようになるのであった。このことから、「無意識における文字の審級」とは、無意識において何かが文字という「審級」を通ること、あるいは後に論じるように、さらに、無意識それ自体が文字によって構成されているということ、これを意味していると理解することができる。

さらに少し後のところで、ラカンは「文字」について「具体的なディスクールがランガーシュから借りている物質的な支え」(E 495)のことだと説明している。「物質的なmatériel」ということで含意されているのは、それが精神的なものでも身体的なものでもない、ということである。この「物質的な支え」こそが、シニフィアンである。

ラカンによれば、精神分析において問題となる症状が、ランガーシュと同一の構造によって支えられており、このランガーシュの構造は二重性によって基礎づけられているのだが、それは、「互いに結び合わされる、シニフィアンとシニフィエという二つの領域を、互いに異なる法則に従わせている」ような二重性である (E 444)。よく知られているように、シニフィアンとシニフィエとは、言語学者フェルディナン・ド・ソシュールが自らの言語学の基本概念として練り上げたものである。ソシュールは言語記号が「事物と名前」ではなく「概念と聴覚映像image acoustique」とを結び合わせていると考えた。この「聴覚映像」とは、物理的な音ではなく「この音の心的刻印、我々の感覚によって証拠立てられるこの音の表象」のことである。そしてソシュールは、概念と聴覚映像を、シニフィエとシニフィアンに置き換えることを提案したのであった⁽⁴⁾。

しかしラカンは、「シニフィアン」を聴覚映像という意味においては使用していない。1953年9月にローマで行われた学会の報告のなかで、彼はシニフィアンを「一つの構造によって結び合わされた物質的諸要素の総体によって構成されている」と定義している⁽⁵⁾が、このことから、先の引用箇所にあった、ランガーシュに条件づけられていて、ディス

クールを構成している音や文字などの物質的支えとはシニフィアンである、とすることができる。記号の内容がシニフィエである。そして、我々にとっての現実を構造化しているのは、このシニフィアンに他ならない。「人間の現実は、それ以上還元できない形で、シニフィアンとして構造化されていることを、哲学者達が長い間等閑視してきたことには驚かすにはおれません。(…) 私達が分析に導き入れているような現実という概念は、シニフィアンの緯糸・葉脈があって初めて成立するものです。」⁽⁶⁾

この点に関連して、ラカンのシニフィアンの理論において強調されるのが、「シニフィアンのシニフィエに対する優位」(E 467)である。

ラカンはソシュールによるシニフィエ／シニフィアンの式「s/S」の分子と分母を入れ替えて、「S/s」と記した(cf. E 497)。これは、「シニフィアンがシニフィエの上にある、上にあるとは、二つの相を分割する横線barreに应じてのものである」(E 497)ことを示している。これのアルゴリズムには、無意識のメカニズムを理解するうえで、もっぱらシニフィアンに注目すべきである、という主張が込められている。

では、なぜシニフィアンに注目すべきなのか。それは、シニフィアンこそがシニフィエを生成させる、より詳しくは、シニフィアンが他のさまざまなシニフィアンとの差異を示していることによって、特定のシニフィエを持つことが可能となっている、という理解があるからである。

「通常、我々が分析において前景においているのは、つねにシニフィエです。それは、シニフィエこそ、より我々の気を惹くものであり、シニフィエこそ一見したところ精神分析の象徴的な探究の固有な次元であるように見えるからです。しかし、シニフィアンの根源的な仲介という役割を無視すれば、つまり先導的な役割を果たすのは実際にはシニフィアンであることを無視すれば、神経症という現象の根本的な理解や、夢の解釈自体が狂ってしまうだけでなく、我々は精神病に起きていることを理解することがまったくできなくなってしまいます。」⁽⁷⁾

すなわちラカンは、ラカンがシニフィアンとシニフィエとの間のいわば垂直的な関係よりも、むしろ、シニフィアンと別のシニフィアンとの間の水平的な関係の方を重要と考えていたのである。

この点に関して、ラカンは、ソシュールが表裏一体のものとしたシニフィアンとシニフィエとの関係を切り離し、「シニフィアンの自律」という考え方を導入している。

ソシュールはシニフィアンとシニフィエという概念を導入したとき、両者の結びつきの恣意性、つまり、結びつきに必然性がないこと、を既に述べていた。「シニフィアンをシニフィエに結びつける紐帯は、恣意的である。」⁽⁸⁾ しかしソシュールは両者の表裏一体にして切り離しがたいものと考えていた。ラカンにとって、確かにシニフィエを伴わないシニフィアンは存在しないにせよ、より原初的なのはシニフィアンであり、シニフィエの成立については、シニフィエを抜きにしたさまざまなシニフィアン同士の関係に基づく、と考えることができるようになる。たしかにソシュールにおいても、記号の意味の成立においては他の記号との差異ということが言われていた。すなわち、言語とは差異の体系であって、それぞれの記号は、他の記号との差異のみを表しているに過ぎない。とすれば、シニフィアン同士の関係に基づいて初めてシニフィエが成立する、と考えるよいことになる。かくして、シニフィエなきシニフィアンというものが取り出されてくる。

「シニフィアンに固有のさまざまな結びつき」と「それらがシニフィエの発生において果たしている機能」について、ラカンは次のように書いている。「こうした原初的な区別は、古代の考察以来練り上げられたような、記号の恣意性に関する議論をはるかに超えて、さらに、たとえ名づけの行為であったにせよ、語と物の一対一対応を妨げる、同じ試練の時代以来の袋小路からも、はるか先へと進んでいるのである。」(E 497)

シニフィアンとシニフィエが一対一に対応していないという点について、ラカンは非常に印象的な逸話を例としてとりあげている。「列車が駅の構内に入ってくる。客室のなかに、少年と少女、弟と姉が向かい合って座っている。外側に面した客室の窓からは、列車が停まっているプラットフォームに並行して立っている建物が見える。『ほら、婦人用だよ』と弟が言うと、姉は答える。『馬鹿ね、紳士用じゃないの。』」(E 500) プラットホームの小さな建物とはトイレのことであり、そこに「紳士」あるいは「婦人」の、いずれかのシニフィアンが記されてあることによって、その建物はまったく違ったシニフィエを持つことになる。この例は単に、シニフィアンとシニフィエが一対一に対応するわけではない、ということばかりではなく、むしろさまざまなシニフィアンがお互いの差異によってシニフィエを生成させた後において、初めて成立する事態である。

「シニフィアンは、シニフィエとは無関係に、固有の法を持っています。」⁽⁹⁾ ラカンはこのことを、「シニフィアンの自律」と呼んでいる。この点に関してラカンが好んで持ち出すのは、昼と夜の区別である。昼あるいは夜という概念は、現実においては把握することができず、ただ、これら二つのシニフィアンの対比においてのみ、それぞれが固有のシニフィエを持つことができる。我々が現実と呼んでいるものもまた、シニフィアン同士の

対比において成り立っている。「昼と夜、男と女、平和と戦争、こういう対立は他にもいくつでもあげることができます。これらの対立は現実的な世界から導き出されるものではありません。それは現実の世界に骨組みと軸と構造を与え、現実の世界を組織化し、人間にとって現実が存在するようにさせ、そのなかに人間が自らを再び見出すようにする、そういう対立です。」⁽¹⁰⁾ シニフィアンはシニフィエがなくても、シニフィアンだけで存在することが可能である。シニフィエは、シニフィアンと比べてあくまで副次的なものでしかない。したがって問題とすべきなのは、あくまで複数のシニフィアンの間に成り立っている関係なのである⁽¹¹⁾。

このことから、ラカンにおいては、シニフィアンとシニフィエとの間に引かれた「横線barre」の持つ重要性が強調される。すなわち、この「横線」は、シニフィアンとシニフィエとの区別が維持されている限りにおいては、シニフィアンの側とシニフィエの側とを厳密に区別する働きを担っている。しかし、この「横線」は、けっして踏み越えられないものではない。つまり、この「横線」は、シニフィアンがシニフィエの位置へと「滑り込む」ことによって、踏み越えられることもある。これについては後で検討するが、いずれにせよここでは、シニフィエとシニフィアンとが秩序を異にしており、後者に優位性が認められていることを確認しておきたい。

2 シニフィアンの連鎖

シニフィアンの構造について、ラカンは次のように説明している。

「シニフィアンの構造とは、一般に言語について言われるように、それが分節化されている、ということです。／このことが言わんとしているのは、ということです。すなわち、そのさまざまな単位は、それらの相互的な侵食や増大する包括を描写するためにはそこから出発するのだが、そうしたさまざまな単位は、最終的な示差的諸要素に還元されるのと、ある閉じた次元の諸法則に従ってそれらを構成するという二重の条件に従っているのです。」(E 501)

シニフィエの成立において複数のシニフィアン同士の関係を考えるべきということ、そこから、「シニフィアンの連鎖」(E 502)という概念が出てくる⁽¹²⁾。これは、「言語には差異しかない」、すなわち、言語をさまざまな差異からなる体系と見なし、個々の記号

そのものには、何か特定の事物や概念、意味との必然的な結合を意味するものは何もなく、ただ、特定の言語体系のなかで、他のさまざまな記号との差異によってのみ何ごとかを意味することができるようになる、というソシュールの考え方を引き継いでいる。

「意味が執拗に存続する *insiste* のは、まさしくシニフィアンの連鎖のなかであるが、連鎖のさまざまな要素のどれ一つとして、ちょうどそのとき可能であるような意味作用からなっている *consiste* わけではない、とすることができる。」(E 502)

シニフィアンがシニフィエを持つのは、シニフィアンが複数存在し、それらが連鎖をなしているからに他ならない。そしてこのことは、我々が発する言葉の連なり、あるいは文章において、個々の語＝シニフィアンが持つ意味というのは、他のシニフィアンとの並びのなかでのみ意味を持つということ、したがって、特定の語が持つ意味は、その語の後からどのような語が続くかに依存している、ということである。

だとすれば、シニフィアンとシニフィエとの結びつきは非常に流動的なものにとどまらざるを得ない。あるシニフィアンに対して、それと結び付けられるシニフィエは一定しない。ラカンが、シニフィアンとシニフィエとの関係は「つねに流動的であり、つねに解体せんとしている」⁽¹³⁾と述べている。

ここには、「シニフィアンの下でのシニフィエの絶えざる横滑り」(E 502)と呼ばれる事態が生じている。どういうことか。まず、ラカンによれば、「シニフィエとは意味作用 *signification* です」⁽¹⁴⁾ところでまた、精神分析の経験においてははっきりと現れている真理として、「あらゆる意味作用は、他の意味作用に回付されるに過ぎない」⁽¹⁵⁾ということが述べられてもいる。したがって、一つのシニフィアンにつき、原理上は無数の、とは言えないまでも、相当に多数の意味作用が連なって結びつくことが可能である。

それでは、シニフィエの横滑りは止まることはないのか。もしそうだとすれば、意味が確定されないどころか、シニフィアンの際限のない氾濫が生じてしまうだけではないのか。もちろん、そういうことはない。確かにシニフィアンは、単独で用いられるならば、多数の意味作用を持つことがありうる。しかし、意味作用の「回付」に一定の枠をはめ、制限を加えていくのは、後に続く他のシニフィアンである。すなわち、一続きのシニフィアンのなかでならば、それぞれのシニフィアンが持ちうる意味作用の選択の幅は、かなり限定される。ラカンが、少し後のところで次のように述べているのも、この点を裏付けている。「ある用語の意味作用は、その用語の可能な用法の集合によって規定されるのでなければ

ならない、という考え方から出発しましょう。』⁽¹⁶⁾ すなわち、ラカンにとって意味作用とは「可能な用法の集合」のことなのである。

そして、シニフィアンの連鎖が一定の区切りのもとに纏め上げられ、それぞれのシニフィアンが限定された意味作用を持つようになるとき、重要な役割を果たしているのが、ラカンの言う「クッションの綴じ目 le point de capiton」である。すなわち、この「クッションの綴じ目」によって、「さもなければ際限のないものになってしまう意味作用の横滑りを、シニフィアンが止める」(E 805)と説明されている。

ラカンは『精神病』のセミナーにおいて、この「クッションの綴じ目」について『アタリー』という戯曲を例にあげて説明している⁽¹⁷⁾。そこで取り上げられているのは、女王アタリーの将官アブネルと大祭司ジョアドとの対話の場面である。ジョアドは、生後二ヵ月半のときに女王アタリーに殺害されそうなところを助け出したエリアサンを自分の子として密かに育てており、このエリアサンを王位につかせようと企てている。アブネルは神殿にやってきてジョアドに危機が迫っていることを警告しつつ、ジョアドの意図に対して探りを入れるのだが、そのときジョアドは、「神の御心に従う私は／アブネル殿、神を畏れる他は何も恐れはせぬ」という文言によって、アブネルにある暗示を行う。かくしてアブネル自身もまた、女王アタリーを陥れるたくらみに加わることになる。ラカンによれば、このときの「神への畏れ」というシニフィアンの持つ効力によって、例えば「熱心な信心深い者たち」という言葉は、女王に対するレジスタンスに参加すべきだ、というニュアンスを与えられることになる。かくして、アブネルとジョアドの対話を構成している曖昧さをはらんだ一連のシニフィアンに、一定のシニフィエが結びつけられることとなる。

「この場面を一つの楽譜のようなものとして分析していたならば、我々は、そこに、二人の登場人物の間を実際に巡っているさまざまな意味作用というつねに浮動する塊と、テキストとの間で、シニフィエとシニフィアンとが結びつく点 point があるのが分かったことでしょう。』⁽¹⁸⁾ すなわち、意味作用が生じてくるためには、シニフィアンの横滑りに対してシニフィエを結び合わせる——それは、「二つの項の結びつきには少しばかりの柔軟性が残されている」⁽¹⁹⁾ という仕方で——働きがなければならないのであり、そのときの中心点となるのが、この「クッションの綴じ目」だ、ということなのである。

「このクッションの綴じ目の、文における通時的機能を見ていただきたい。文のそれぞれの語は他のさまざまな語の構成のなかで予測され、この語は逆にその遡及的效果によ

って他のさまざまな語の意味を刻印するのだが、このようにして文はその意味作用を締めくくるのである。」(E 805)

したがってそれぞれの文において、「シニフィアンの事後的な *nachträglich* 働き」⁽²⁰⁾ が見出されるのである。

3 無意識のメカニズムとしての換喩と隠喩

ラカンが主体のディスクリールにおける二つのプロセスについて語っている。それは、換喩と隠喩である。

この隠喩と換喩とは、ヤコブソンの失語症に関する研究から、そのアイデアを借りている。すなわち、ヤコブソンは「言語の二つの面と失語症の二つのタイプ」という論文のなかで、まず、ディスクリールには選択—相似の連関（互いに等価な対立項の間で選択すること）と結合—隣接の連関（要素的な言語単位を、より大きな単位へと結合すること）という二つの面があるとしたうえで、これらのどちらが侵されたかによって、失語症を相似性の異常と隣接性の異常という二つのタイプに分類した。つまり、相似性に障害を受けた失語症患者は、語を見つけ出すのに非常に苦心するのに対して、隣接性に障害を受けた患者は、単語は見つけ出せても構文を作り出すことが難しくなるのである。ヤコブソンはこうした区別をしたうえで、相似性と隣接性は隠喩と換喩において最も凝縮された表現を見出す、と述べた⁽²¹⁾。

ラカンはこの隠喩と換喩という区別を、無意識のメカニズムを説明するのに役立てている。とはいえ、ラカンの議論においては、この区別にオリジナルな着色がほどこされ、もともとのヤコブソンの概念とは違ったものになっている。すなわち、ラカンはこの隠喩と換喩を、フロイトが『夢判断』のなかで「夢の作業」として提示した「圧縮」と「置き換え」になぞらえ、無意識のメカニズムとしてあらためて提示したのである。

「隠喩と換喩の対比は根本的なものです。というのはフロイトが神経症のメカニズムのなかで初めから重点をおいているもの、またそれと同じように夢のメカニズムとか日常生活の辺縁的な現象のメカニズムについて初めから重点をおいているものは、隠喩でも同一化でもないからです。実はその逆なのです。大雑把に言えば、フロイトが圧縮と読んでい

のが換喩にあたります。シニフィアンという装置全体の構造化、語の体系としての実在こそが、神経症に現れる現象にとって決定的な役割をもっています。なぜかという、シニフィアンとは、消えてしまったシニフィエが表現される道具だからです。それだからこそ、シニフィアンに再度注目しながらフロイトの発見の出発点に立ち戻るのが最良の策といえましょう。」⁽²²⁾

ではまず、換喩について見てみよう。換喩とは部分と全体、原因と結果など、表現するものと表現されるものとの間に必然的な結合があるような比喩のことを指す。ラカンはよく、換喩として「三〇枚の帆」の例を取り上げる。この「三〇枚の帆」は「三〇隻の船」の換喩である。この換喩についてラカンは、船が実際に一枚の帆しかもっていないということは稀なのだから、帆と船との結合関係が成り立っているのは現実の船を参照することによってではなく、あくまでシニフィアンの連続性のなかにおいてであると結論づける。つまり、シニフィアンの連続性のなかで、あるシニフィアンが別のシニフィアンと関連づけられることによって、換喩が機能するのだ、というのである。ラカンはこのことを、シニフィアンの連続性のなかで「意味作用の転移」⁽²³⁾が生じているのだ、とも言い表している。

次に隠喩であるが、これは先にあったように、あるシニフィアンを別のシニフィアンで代理すること、置き換えることである。

隠喩の例としてラカンが好んで取り上げる例は、「眠れるボアズ」というユゴーの詩に見られる詩句「彼の麦束は欲深くも、恨み深くもなかった Sa gerbe n'était pas avare ni haineuse」である (E 506)。「ボアズ」の代わりに「彼の麦束」が用いられることによって、新しい意味が浮かび上がってくる。麦束が欲深かったり恨み深かったりするわけではないので、文字通りに読むならば、これは意味が通らない表現だ、ということになるかもしれない。しかし、主語の位置に「彼の麦束」が来ることで、「麦束」は、直接には表現されてはいない「多産性」という次元を現れさせながら、気前のよいボアズと同一化され、これによってこの詩文は全体として、年老いたボアズの父性の到来を表すこととなる。そしてこうした効果は、まさしく、「彼の麦束」というシニフィアンが「ボアズ」というシニフィアンの代わりを果たしている、ということによるのである。「隠喩の構造が示しているのは、詩あるいは創作に属する意味作用の効果が生まれるのは、言い換えれば、問題となっている意味作用の到来という効果が生まれるのは、シニフィアンがシニフィアンに置き換えられるときだ、ということである。」 (E 515)

ラカンが隠喩と換喩を持ち出すのは、これら二つの働きが、いずれも、シニフィアンが連鎖をなしていることに基づいている、ということを説明するためである。これに関して、ラカンは換喩の方が根源的だと考えている。「換喩がなかったならば隠喩もなかっただろう」⁽²⁴⁾。つまり、換喩において見られるようなシニフィアンの連鎖における隣接関係があるからこそ、隠喩が可能となるのだ、ということなのである。

「隠喩の創造的なきらめきは、一方のシニフィアンがもう一つのシニフィアンの代わりに、シニフィアンの連鎖におけるその場所を占めることによって置き換えられた、そのような二つのシニフィアンの間から湧き出てくる。このとき、隠されたシニフィアンは、連鎖の残りの部分との（換喩的な）結合によってそこに現前しつづけている。」(E 507)

以上のように、ラカンにおいて隠喩と換喩という説明は、シニフィアンの連鎖というアイデアを根拠づけるとともに、無意識のメカニズムをより巧みに説明するために用いられているのである。

4 主体の位置

かくして重要な問題は、シニフィアン同士の関係がどうなっているか、ということになるのだが、こうしたシニフィアンの優位性は、主体の思考にたいしても、やはり主張される。

「ただ精神分析のみが、シニフィアンは、それほど反省的ではないものであれ、いかなる思惟もなしですませるということを示すことで、こうした優位性を思考に課することができる。これによって、主体に隷属しているさまざまな意味作用における、疑わしいところのない再編成を遂行するのである。そればかりではなく、シニフィアンはまた、疎外的な侵入によって主体のうちに顕現するのであり、分析における症状の概念が、その侵入の、浮き出た一つの意味をとる。すなわちそれは、シニフィアンという意味であり、この意味は主体のシニフィアンに対する関係を含んでいるのである。」(E 467)

とすれば、このような意味でのシニフィアンの優位性のもとで、主体の位置はどのようなものとして定められるのであろうか。

まず言えることは、ラカンのいう主体とは、個人のことでなくても自己意識を備えた

思考する主体つまり哲学でいう主体のことでもなく、無意識の主体であり、この無意識の主体に接近するためには、言語を、したがってまたシニフィアンを介さなければならない、とラカンは考えていた、ということである。ラカンにとって、我々が「主体」と見なしているのは自我であり、自我とは想像的な構成物にすぎない。⁽²⁵⁾

この点に関して、ラカンはしばしば、デカルトのコギトを引き合いに出す。たしかに、私が考えているまさにその限りで、私は存在する。しかし、フロイトによる無意識の発見は、意識と存在とを同一視することを許さない。ラカンによれば、むしろ、「私は、私が存在しないところで考える、それ故、私が考えないところに私は存在する」(E 517)とすべきなのである。

このようなことが言われるのは、ラカンが、デカルトの命題を、表現されたもののレベルと、その表現を現実化させている作用＝行為のレベルとを区別して考えているからである。つまり、表現されたコギトの主体は、表現することの主体とは区別されるのだ、と考えているのだ。ラカンの次のような文章は、まさしくそのことを言わんとしている。

「私がシニフィアンの主体として占めている場所は、私がシニフィエの主体として占めている場所に対して、同心的なのか離心的なのか、これが問題である。／私が、自分がそれであるものに合致した仕方での私のことについて語っているかどうか、ではなく、私がそれについて語っているとき、私は私がそれについて語っているものと同じものであるかどうか、ということなのだ。」(E 516f.)

つまり、ラカンの考えでは、「我思う」の主体であると同時に「我在り」の主体であることはできない。それらのいずれかを選ばなければならない⁽²⁶⁾。

ラカンはこのことを、「言表 énoncé」の主体と「言表行為 énonciation」の主体との区別という形で論じることもある。彼が好んで持ち出すのは、「私は嘘をついている」というよく知られたパラドクスである。「嘘をついている」という内容が正しいとすると、この言表をした「私」は正しいことを言っていると同時に嘘をついていることになり、矛盾が生じる。また、内容が間違っているとすれば、嘘をついていることになるので、言表者は正しいことになり、やはり矛盾が生じる。ラカンはこのパラドクスについて、言表と言表行為を区別し、言表における「私」と言表行為の「私」は同じではない、とすることで、「私は嘘をついている」は完全に有効だ、と結論づける。「『私は嘘をつく』という言表はそのパラドクスにもかかわらず完全に有効であることはまったく明らかです。というのは、

この言表している『私』、すなわち言表行為の『私』は、言表の『私』、すなわち言表という形でそれを指し示している転換子 shifter と同じものではないからです。』⁽²⁷⁾

では、言表行為の主体は、いったいいかにして捉えられるのか。我々自身が思考の主体である場合には、主体は思考することそれ自体において確証されるのだ、と答えることができるのかもしれない。しかし、ラカンにおいて、語るのは主体ではなく、エスである。この意味において、主体はシニフィアンの主人ではない。主体がまずあって、それがシニフィアンを操作するのではない。主体が顕現するのは表現を介してであるが、それ以前に主体は存在しているとは言えない。したがって、主体が存在するものとして現れてくるのは、シニフィアンの働きがあるからこそである。しかも、言表された主体たる「私」は、言表行為の主体とは同じではなく、言表行為の主体はそれ自体として到達されることなく、事後的に接近されることがあるのみである。そしてそうであるならば、言表行為の主体＝真の主体たる無意識の主体とはまさしく、シニフィアンの効果である、と行うことができる。「主体はシニフィアンのさまざまな効果によって構成されているという意味において、無意識とは、パロールがある主体に及ぼす効果の総和です。』⁽²⁸⁾

さらに、ラカンは主体について、次のようにも記している。「この主体とは、シニフィアンが代理表象する *représenté* もののことであり、シニフィアンはもう一つのシニフィアンに対してでなければ、何も代理表象することがない。」(E 835) これは、「シニフィアンとは、他のシニフィアンに対して主体を代理表象するものである」(ex. E 819) という形で、ラカンの（もう一つの）テーゼとしてよく知られたものである。

ラカンはこのテーゼによって、何を言わんとしているのか。それを理解するために、ラカンの（おそらく、もっとも分かりやすい）説明を引用してみよう。

「この公理を解りやすい形で思い描くために、象形文字が一面に書かれた石を砂漠で見つけた、と考えるみてください。みなさんは、これらの文字を書くためにその背後に主体がいた、ということを一時も疑うことはないでしょう。しかしそれぞれのシニフィアンがあなたへと差し向けられていると考えるとしたらそれは間違いです。その証拠に、あなたはそれらの文字から何も理解することはできません。それに対して、あなたはそれぞれのシニフィアンが他のそれぞれのシニフィアンと関係しているという点については確かだと考えているからこそ、これらの文字をシニフィアンであると結論するのです。主体と〈他者〉の領野との関係において重要なのはまさにこのことです。』⁽²⁹⁾

要点を次のようにまとめておこう。シニフィアンがそこにあると我々が理解するためには、それが誰かによって記されたものであること、さらに、別のシニフィアンとの関係のもとに捉えることができること、この二つの条件がそろっていないなければならない。このことは、そこにシニフィアンが二つ以上見出されなければならない、ということを経験しなくても含意しない。そうではなく、誰かが、こう言ってよければ意図的にそれをシニフィアンとして残したと理解するという、そして、その者は同じようなやり方で同種の他のシニフィアンをも残しえたということ、これらを見て取ることができれば十分である。

「〈他者〉の領野」という言葉が上の引用箇所にあるのも、このことと関係している。すなわち、〈他者〉とは、絶対的な第三者のことであり、私と他人とがコミュニケーションを行う場面において前提として共有しているルールのことでもある。砂漠で見つけた象形文字がたとえ一文字であったとしても、一定のルールのもとに用いられている他のさまざまな象形文字の一つであるということが見て取られれば、それはシニフィアンと見なすことができる。

さらに、たとえ「私」という人称代名詞であれ、固有名であれ、主体自身もまた、シニフィアンによってしか表されることがない。そして、シニフィアンは別のシニフィアンとの関係のもとで初めて機能するのであるから、結局のところ、主体はつねにシニフィアンによって媒介されたものであり、かつ、別のシニフィアンを参照することによってのみ、それとして現れてくることができる。この意味においてもやはり、主体とは「シニフィアンの効果」によって現れてくるものに他ならない、とすることができるわけである⁽³⁰⁾。

同様に、無意識の欲望というのもまた、言語を通してのみ接近することができるようなものである。「パロールの介入というこの時点で、欲望は主体によって感知されます——欲望は、パロールとの結合がなければ感知されることができません。」⁽³¹⁾ パロールとは個人によって語られる言葉のことであり、それはシニフィアンによって成り立っているのだから、これを言い換えれば、欲望とはシニフィアンの効果だ、ということになる。「シニフィアンの装置、シニフィアンの戯れの内部で表現されているのは、主体の奥深いところから現れる何ものである、それは欲望と呼ぶことができるものです。」⁽³²⁾ あるいはさらに、「欲望の機能は、主体におけるシニフィアンの効果の最終的な残滓です。」⁽³³⁾

だとすれば、ここで、本論の冒頭において述べた「無意識は一つのランゲージュとして構造化されている」というラカンの言葉について、それが言わんとしていることを

(余すところなく、とは言えないまでも)理解することができるだろう。

まず、無意識とはシニフィアンの連鎖を介して初めて現れてくるのであり、それ以前には存在する、あるいは存在したとはけっして言うことができない。この意味において、シニフィアンは無意識の条件をなしている。「無意識は原初的なものでも、本能的なものでもありません。無意識は、もともと、シニフィアンのさまざまな要素しか知らないのです。」(E 522)⁽³⁴⁾ さらに、分析の場面において問題となるのはパロールであり、無意識はパロールによってそのものとして表されるのではなく、分析家は患者のパロールを通して無意識に接近するのであるから、次のように言うことができるわけである。すなわち、「無意識とは主体に対するパロールの効果です。それはパロールの効果の発展のなかで主体が決定される次元です。」⁽³⁵⁾ そして、パロールが発せられてそれが他者に聞き届けられるためには、つねにランゲージュがそこになければならず、したがってパロールはランゲージュを前提とし、それを頼りとしているのであるとすれば、無意識もまた、ランゲージュを前提とし、それを頼りとしているはずである⁽³⁶⁾。ラカンが論文「治療の指導とその能力の諸原則」のなかで、「無意識はランゲージュの根本的な構造を持っており、ある物質matérielが、実定的なpositives諸言語つまり実際に話されているか話されていた諸言語の研究が見出す諸法則にしたがって、働いている、という事実」(E 594)を強調しているのも、このことからである。

したがって、「無意識は一つのランゲージュとして構造化されている」というテーゼは、比喩としてではなく、文字通りの意味で捉えられるべきもののなのである。

最後に、本稿を閉じるにあたって、今後の課題として二つの問題を指摘しておきたい。一つは、「無意識が一つのランゲージュとして構造化されている」というテーゼを上記のような意味で、すなわち、「無意識はシニフィアンの連鎖を通して現れてくる」という意味で理解するとき、そのシニフィアンの連鎖それ自体の構造化はどのような原理に基づいているのか、という点である。そしてもう一つは、そうした原理において、ラカンが特権視しているいくつかのシニフィアン、とりわけファルスのシニフィアンと「父の名」のシニフィアンがいかなる役割を果たしているのか、という点である。ラカンにおけるシニフィアンの理論を解明するためには、これらの点を明らかにすることが不可欠である。今後の課題としたい。

(注)

- (1) 精神分析が言語を用いて行われることについては、主体の成立の問題という観点から、拙論「ラカンを読む(1)——「精神分析におけるパロールとの機能と領野」における主体の「先取り」の構造について」(『城西国際大学紀要』第12巻第2号、城西国際大学人文学部、2004年所収)において既に論じた。
- (2) J. Lacan, 《Radiophonie》, dans *Autre écrits*, Paris, Seuil, 2001, p. 406. さらにラカンは(この「ラジオフォニー」と同じ1970年に)別のところでも次のように記している。「ランガージュは無意識の条件である(…)実際、ランガージュなしには無意識は存在しない」(J. Lacan, 《Préface à une thèse》, dans *Autre écrits*, op. cit., p. 400f.)。
- (3) 本論では、論文「無意識における文字の審級、あるいはフロイト以後の理性」及びその他の論文に関して、引用はすべて『エクリ』(Jacques Lacan, *Écrits*, Paris, Seuil, 1966)から行い、略号Eとその頁数を本文中に記すこととする。ラカンのセミネールからの引用については、注にセミネールの巻数と頁数を記す。
- (4) F. de Saussure, *Cours de linguistique générale*, Paris, Payot, 2000, p. 98f. 邦訳：フェルディナン・ド・ソシュール、『一般言語学講義』、小林英夫訳、岩波書店、1972年、96—97頁。
- (5) J. Lacan, 《Discours de Rome》, dans *Autre écrits*, op. cit., p. 148.
- (6) J. Lacan, *Le Séminaire*, livre III, *Les Psychoses*, Paris, Seuil, 1981, p. 224. 邦訳：ジャック・ラカン、『精神病(下)』、小出浩之・鈴木國文・川津芳照・笠原嘉訳、岩波書店、1987年、70—71頁。
- (7) J. Lacan, *Le Séminaire*, livre III, *Les Psychoses*, p. 250. 邦訳：ラカン、『精神病(下)』、前掲書、108頁。
- (8) F. de Saussure, *Cours de linguistique générale*, p. 100. 邦訳：ソシュール、『一般言語学講義』、前掲書、98頁。
- (9) J. Lacan, *Le Séminaire*, livre III, *Les Psychoses*, p. 223. 邦訳：ラカン、『精神病(下)』、前掲書、68頁。
- (10) J. Lacan, *Le Séminaire*, livre III, *Les Psychoses*, p. 224. 邦訳：ラカン、『精神病(下)』、前掲書、71頁。
- (11) とはいえ、シニフィエに対するシニフィアンの優位を認めているからといって、ラカンが意味の問題を二次的なものと考えていた、ということはない。例えば、ラカンにとって意味の問題は、ソシュールのシニフィアンの概念を採り入れる以前から、非常に重要なものであったし、またシニフィアンの概念を採り入れた後も、やはり重要なものであり続けた。この点に関しては、原和之、『「ラカンの」概念としての『シニフィアン』(1)——延命する最後の『ソシュール現象』からの離脱の試み——』(『電気通信大学紀要』第13巻第1号、2000年)が参考になる。
- (12) 「フロイト以来、無意識は、どこかで(別の場面で、とフロイトは書いている)くり返され、また、実際のディスクリールやそれで形を与えられた思惟が無意識のために差し出す裂け目にしつこく入り込んでいこうとする、シニフィアンの連鎖である。」(E 799)
- (13) J. Lacan, *Le Séminaire*, livre III, *Les Psychoses*, p. 297. 邦訳：ラカン、『精神病(下)』、前掲書、177頁。
- (14) J. Lacan, *Le Séminaire*, livre I, *Les écrits techniques de Freud*, Paris, Seuil, 1975, p. 272. 邦訳：ジャック・ラカン、セミネール第一巻『フロイトの技法論(下)』、小出浩之・鈴木國文・小川豊昭・小川周二訳、岩波書店、1991年、136頁。さらに、ラカンは『精神病』のセミネールのなかで、はっきりとこう述べている。「ここで気をつけないといけない罣、落とし穴は、シニフィエとは対象であり物であると思い込んでしまうことです。シニフィエとは、そ

ういうものではまったくありません。シニフィエとは意味作用significationです。」(J. Lacan, *Le Séminaire*, livre III, *Les Psychoses*, p. 42. 邦訳：ラカン、『精神病(上)』、小出浩之・鈴木國文・川津芳照・笠原嘉訳、岩波書店、1987年、50頁) 実際、ラカンはこの『精神病』のセミナー(1955-1956)において、「意味作用」という言葉を「シニフィエ」と同じ意味で使用しつづけている。

- (15) J. Lacan, *Le Séminaire*, livre I, *Les écrits techniques de Freud*, p.272. 邦訳：ラカン、セミナー第一巻『フロイトの技法論(下)』、前掲書、136頁。
- (16) J. Lacan, *Le Séminaire*, livre I, *Les écrits techniques de Freud*, p.272. 邦訳：ラカン、セミナー第一巻『フロイトの技法論(下)』、前掲書、137頁。
- (17) J. Lacan, *Le Séminaire*, livre III, *Les Psychoses*, pp. 297-304. 邦訳：セミナー第三巻『精神病(下)』、前掲書、179-190頁。
- (18) J. Lacan, *Le Séminaire*, livre III, *Les Psychoses*, p. 303. 邦訳：ラカン、『精神病(下)』、前掲書、190頁。
- (19) J. Lacan, *Le Séminaire*, livre V, *Les formations de l'inconscient*, Paris, Seuil, 1998, p. 13. 邦訳：ラカン、『無意識の形成物(上)』、佐々木孝次・原和之・川崎惣一訳、岩波書店、2005年、9頁。
- (20) J. Lacan, *Le Séminaire*, livre V, *Les formations de l'inconscient*, p. 15. 邦訳：ラカン、『無意識の形成物(上)』、前掲書、11頁。なお、ラカンは次のようにも述べている。「何が言われているのかが解るためには、文が終了していなくてはなりません。文というものは完成されていなくてはフレーズではあり得ません。意味は文が完成されたあとから après coup やって来るのです。」(J. Lacan, *Le Séminaire*, livre III, *Les Psychoses*, p. 224. 邦訳：ラカン、『精神病(下)』、前掲書、179頁)
- (21) Roman Jakobson, 《Two Aspects of Language and Two Types of Aphasic Disturbances》, in *Fundamentals of Language*, 1956. 邦訳：ロマン・ヤコブソン、『一般言語学』(川本茂雄監修、田村すゑ子・村崎恭子・長嶋善郎・中村直子訳、みすず書房、1973年) 所収。
- (22) J. Lacan, *Le Séminaire*, livre III, *Les Psychoses*, p. 250f. 邦訳：ラカン、『精神病(下)』、前掲書、109-110頁。

隠喩と換喩は、「無意識における文字の審級」では、次のように記されている。

「Verdichtung、圧縮とは、隠喩がそこでみずからの領野を持つような、シニフィアの重ね合わせの構造である。この名称は、それ自身のなかに詩作Dichtungという語を圧縮している点で、〔圧縮の〕メカニズムと詩との同族性を示唆しており、これは、〔圧縮の〕メカニズムが、詩がまさしく伝統的に持っている機能を包み込むほどである。

Verschiebung、移動——これは、ドイツ語の方が適当な言葉のようである——は、換喩が示している意味作用の移し替えである。フロイトのなかに初めてこの言葉が現れてから、移動は、検閲の裏をかくために無意識が用いるもっとも適切な手段として提示されている。」(E 511)

- (23) J. Lacan, *Le Séminaire*, livre V, *Les formations de l'inconscient*, p. 74. 邦訳：ラカン、『無意識の形成物(上)』、前掲書、104頁。
- (24) J. Lacan, *Le Séminaire*, livre V, *Les formations de l'inconscient*, p. 75. 邦訳：ラカン、『無意識の形成物(上)』、前掲書、106-107頁。
- (25) ラクー=ラバルトとナンシーは、次のように記している。「ラカンの主体は、シニフィアのなかで、またシニフィアによって、創設されているのである。」(Philippe Lacoue-Labarthe, Jean-Luc Nancy, *Le titre de la lettre. Une lecture de Lacan*, Paris, Galilée, 1990, p. 95) 彼らはこの言葉の直前で、ラカンのいう大文字の〈他者〉もまた主体であるとされている箇

所（「この〈他者〉 l'Autreは、現代のゲーム理論の純粋な主体以外の何ものでもない」（E 806））をも引き合いに出しているのだが、大文字の〈他者〉が主体であるとはどういうことかについて、彼らがここで詳細に論じているということはない。

尚、自我と主体とは別のものであること、また、ラカンにおいて自我及び主体がどのようなものとして提示されているかについては、拙論「ラカンを読む（2）——「フロイト的もの、あるいは精神分析におけるフロイトへの回帰の意味」における主体の自発的な自己一構成について——」（『城西国際大学紀要』第13巻第3号、城西国際大学福祉総合学部、2005年所収）においてくわしく論じておいたので、参照されたい。

- (26) もっとも、ラカンの言うことを受け入れるならば、「我思う」の主体とは、厳密には、まだ「我（私）」とさえ言うことができないような主体のことでなければならない。むしろそれは、表現されたもののレベルから再帰的にのみ語られうるような「我（私）」でしかない。この批判は、デカルトのコギトにも当てはまるはずであるが、さしあたってここでは、ラカンのいう「我思う」の「我」は、フロイトが「エスがあったところに我 Ich を在らしめよ」と記したときの「我」である、と答えておきたい。）
- (27) J. Lacan, *Le Séminaire*, livre XI, *Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse*, p.127. 邦訳：ラカン、『精神分析の四基本概念』、前掲書、182—183頁。
- (28) J. Lacan, *Le Séminaire*, livre XI, *Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse*, Paris, Seuil. 1973, p. 116. 邦訳：ラカン、セミネール第十一巻『精神分析の四基本概念』、小出浩之・新宮一成・鈴木國文・小川豊昭訳、岩波書店、2000年、165—166頁。
- (29) J. Lacan, *Le Séminaire*, livre XI, *Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse*, p.181. 邦訳：ラカン、『精神分析の四基本概念』、前掲書、264—265頁。
- (30) ラカンは論文「無意識の位置」（1964）のなかで、主体のことを「ランガーシュの効果」である、とも述べている（E 835）。
- (31) J. Lacan, *Le Séminaire*, livre I, *Les écrits techniques de Freud*, Paris, Seuil. 1975, p.212. 邦訳：ジャック・ラカン、セミネール第一巻『フロイトの技法論（下）』、前掲書、46頁。
- (32) J. Lacan, *Le Séminaire* livre III, *Les Psychoses*, p. 270. 邦訳：ラカン、『精神病（下）』、前掲書、138頁。
- (33) J. Lacan, *Le Séminaire*, livre XI, *Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse*, p.141. 邦訳：ラカン、『精神分析の四基本概念』、前掲書、202頁。
- (34) 「フロイト以来、無意識は、どこかで（もう一つの舞台上、と彼は書いている）繰り返され、しつこく残り続けることで、実際のディスクールやそれが形を与える思惟が無意識に提供するさまざまな切れ目のなかに入り込んでいく、そのようなシニフィアンの連鎖である。」（E 799）
- (35) J. Lacan, *Le Séminaire*, livre XI, *Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse*, p.137. 邦訳：ラカン、『精神分析の四基本概念』、前掲書、196頁。
- (36) ただし、ルメールが言うように、「ランガーシュが無意識のレベルでどのようにはたっているか、ということを正確に知ることは不可能である。」なぜなら、無意識の領野は、原理上けっして意識されることがないからである。したがって、「我々が無意識のランガーシュを知りうるのは、ただ、それが意識に戻ってくるその様相を通してだけなのである。」（A. ルメール、『ジャック・ラカン入門』、長岡興樹訳、誠信書房、1983年、183頁）

※本論は、文部科学省科学研究費補助金若手研究（B）17720005号（平成17年度～平成19年度）の成果である。